和文入力をAOURで

20250502版

この文書は、AOURの解説、習得と打鍵練習についてまとめたものである。
AOURを理解した上で、効率よく習得するまでの手助けになればよい。

◆目次

目次 ―――1
第一章　AOURとは何か ―――4
AOURとは ……4
主な特徴と考案時の要件　4
盤面図　4
Dvorak配列を土台に　4
拡張的な入力　5
英数字入力はQWERTYで　5
考案に至る経緯　5
作成の経過と名称　5
定義の割当　5
AOUR習得の効果　6
AOURの割当定義（AOUR250502） ……6
〔基本〕母音　6
〔基本〕基本的な子音　6
〔基本〕撥音　7
〔基本〕促音　7
〔基本〕長音符号　7
〔基本〕捨て仮名　7
〔基本〕拗音入力　8
〔基本〕拗音入力の例外　8
〔発展〕外来語特殊音の子音　8
〔発展〕二重母音入力　9
〔発展〕撥音節入力　9
〔発展〕拗音裏打ち　9
〔発展〕左手上段子音の裏打ち　10
〔発展〕促音＋カ・タ行入力　10
〔発展〕促音＋サ・パ行入力　11
〔発展〕ァク音節入力　11
〔発展〕ァツ音節入力　11
〔発展〕長撥音拡張　12
〔発展〕特定定義　12
AOURの実装方法 ……12
ATOKでAOUR　13
Google日本語入力でAOUR　13
DvorakJによるAOUR　13

姫踊子草でAOUR　13
AOURを使う環境　……14
AOUR使用に適した環境は　14
AOURが使えるOS　14
どんなキーボードが良いか　14
第二章　しっかり覚えるAOUR　――15
AOURの習得、向き不向き　……15
ブラインドタッチとAOUR　15
習得にかかる期間　15
AOURの使用による弊害　……16
混同　16
別のパソコン併用　16
AOURを習得しよう　……16
AOURの盤面図と定義一覧　16
初期定位置（ホームポジション）と各指担当キー　17
「あいうえお、小指ヒトヒト中クスリ」　17
二重母音入力は左手上段　18
撥音節入力は左手下段　18
単独の撥音　19
清音・濁音・半濁音の子音キー　19
単独子音キーを持つ外来語特殊音　24
２打鍵子音キーを持つ外来語特殊音　24
拗音は子音同段右人指し指　25
拗音の例外シャ・チャ・ジャ行　26
拗音を含んだ頻出の綴り　26
捨て仮名は右上小指のＰ　27
促音＋カ・サ・タ・パ行入力　27
ア段２音目に「く」か「つ」　28
特定定義における幾つかの類型　28
この後の練習法　28
第三章　AOUR打鍵練習帳　――29
左手中段(母音)　……29
右手中段(子音と長音)　……29
右手上段(子音)　……30
右手下段(子音)　……30
左手上段(子音)　……31
左手下段(拗音子音・促音・撥音)　……31
右手人差し指(拗音)　……31
その他の外来語特殊音　……32
基本入力の仕上げ　……32
二重母音　……32
撥音節　……33
拗音裏打ち　……33
拗音以外の裏打ち　……33
促音＋カサタパ行　……33

ァク音節 …… 34
ァツ音節 …… 34
拡張入力を含めた仕上げ …… 34
補遺 —— 35
AOURの考案・主要更新履歴 …… 35
AOURのWebサイト …… 35
筆者落書き …… 35
定義一覧（AOUR250502） —— 36

－ 序 －

キーボードを使ったかな文字・和文入力は、9割超の人がローマ字入力を使っていて、残る1割未満の人がJISかな入力という状況らしい。
ローマ字入力は、和文入力において最善の方法ではないと気付いても、既に習得しているので、皆それを使い続けている。
ローマ字入力で問題がないと思えばそのまま使い続ければ良いが、より高い効率の方式で打鍵数を少なく、長文入力では少しでも疲労軽減ができるように、加えて単に人と違った方式を使いたいと思えば、これらとは別の選択肢を導入する必要がある。

それらは探せばたくさんあるが、実装して習得して使いこなすのは中々難しい。そういうユーザ層は少なく、方式の乗り換えには時間的なコストが必要で、様々な制約もあるが、より快適な入力環境を得るために努力を惜しまないのであれば、ここで紹介する方式も一つの選択肢となり得ると思うのである。

◆第一章　AOURとは何か

第一章では、AOURとはどういうものかを解説。AOURを知るためにまず一読を。

◇AOURとは

AOURとは、かな文字・和文の入力方式で、Dvorak配列を土台にした行段系の新配列である。
ほとんどの人が使っているローマ字入力は、子音（行）のキーを押してから母音（段）のキーを押してかな文字を入力する。AOURもこのような行段系の入力方式で、Dvorak配列キーボードを概ね土台・基礎として、数々の拡張定義を割り当てた入力方式である。

主な特徴と考案時の要件

この入力方式の考案にあたっては次のような点を要件とし、これがAOURの特徴である。

・高頻度で使う母音は左手ホームポジションに
・二重母音・撥音節拡張入力キーの位置を体系的に配置する
・ATOKやGoogle日本語入力で使えるように
・IMEのローマ字カスタマイズで実装できるように（機器的な配列は変更しない）
・Dvorak配列を土台として類似他方式拡張定義も採用

盤面図

※ 図はUS配列キーボードであるが、JIS配列でも基本的に同じである。

Dvorak配列を土台に

ローマ字入力はQWERTY配列キーボードが基礎となっているが、AOURはDvorak配列のキーボードのキー位置を基礎にして、各キーに定義を割り当てた。Dvorak配列は、五つの母音が左手側中段に都合よく並んでいるので、行段系でかな入力を行うのにわかりやすい。
AOURと同種のDvorak系入力方式には考案時や拡張時に参考にさせていただいたACT、Dvorak JP、JLOD、蒼星、gACT10、ACTARなどがある。

AOURはATOKのローマ字カスタマイズの範囲で実装できることを前提に考案したところもあるので、ATOKの制約でDvorak配列に準拠していない部分も少なくない。

拡張的な入力

AOURでは、単に五十音図の各かな文字を入力するだけではなく、他の入力方式に倣って各種の拡張的な定義を取り入れている。日本語には頻出の文字列類型があって、それらの入力類型に定義を割り当てることにより、入力キー数を削減する。

英数字入力はQWERTYで

AOURは基本のキー位置はDvorak配列相当だが、機器としてのキーボードは一般的なQWERTY配列を使う。日本語入力システム（IME）がオフのとき、英数字入力は通常のQWERTY配列のままで、IMEをオンにしてかな文字入力の状態にしたときにだけ、この方式になるという仕組みである。ATOKへの実装という条件で、結果として句読点の位置がQWERTY配列のローマ字入力と同じであるなど、ローマ字入力と共通性がある部分も少しあり、このことは普通のローマ字入力からの移行に際しては少しの利点となる。

考案に至る経緯

ローマ字入力を約15年、拡張ローマ字AZIKを4年使い、さらに入力効率が向上できる方式はないものかとACTなどDvorak配列系のものに注目。2006年～2007年当時、これらをATOKを使うことを前提にローマ字カスタマイズでの実現性を考えたが難しく、先行のものを参考に入力方式を考えてみることにしたのである。

作成の経過と名称

2006年末頃から割当の定義を考え始め、ATOKで実装・検証しながら2007年1月中旬までに最初の版を作成。その後、自分で実際に使いながら、他の入力方式等の考えなども適宜取り入れながら調整・改版を行い現在に至る。
名称も、作成した定義での語をQWERTY配列に読み替えるようなものが面白いと考え、「亜流」をQWERTYに置き換えた「AOUR」とした。（「aour」と打鍵して変換操作をすると「ありゅう」となる）
自分では「ありゅう」ではなく「エー・オー・ユー・アール」と呼んでいる。
なお、その後の定義拡張で今は「ありゅう」は「aoy」でも入力できる。

定義の割当

AOURの目的はDvorakを使うことではない。快適な和文入力を行うことであるため、Dvorak配列に基づくローマ字綴りをそのまま使いながら、ATOKのカスタマイズ機能の制約で句読点キーに定義を割り当てられない部分や、Dvorak配列のままでは都合の悪い点、QWERTY配列との互換性維持なども考え、これらを他のキーを用いることで代替していった。

QWERTYキーボード、Dvorak配列とAOURにおけるキーの関係は次の表のようなものである。

QWERTY	Dvorak	AOURでの用い方
【V】	【K】	Ty,Ch音相当の子音キー等とする。
【I】	【C】	K音相当、カ行子音キー等とする。

【W】	【,】	W音相当、ワ行子音キー等とする。
【Q】	【'】	V音相当、ヴァ行子音キー等とする。
【,】	【W】	読点のままとする。
【.】	【V】	句点のままとする。
【/】	【Z】	中点のままとする。
【E】	【.】	Z音相当、ザ行子音キー等とする。

AOURにはアルファベット対応の考えはない。QWERTY配列のキーボード上で実装するものであるから、以後この文書でも特定のキーを示すのに【隅付き括弧】で囲んでQWERTYでのキー名を大文字で用いることにする。

AOUR習得の効果

AOURを習得すると、何より、ローマ字入力にはない拡張入力方式を活用することができるので、打鍵数削減効果がある。
単純な調査では、ローマ字入力と比較してだいたい17～18%の打鍵数削減となる。単語によってはJISかな入力よりも少ない打鍵数で入力できる。拡張入力定義を使わないとしても、打鍵数がローマ字入力を超えることはない。

ローマ字入力より打鍵数が少なくて済むということは、高速に入力ができるということでもあるが、それを実感するにはローマ字入力並みにAOURを習得する必要がある。
特に母音が左手ホームポジションに集中していることで、手指の動きも少ないと感じる。文字入力の量が多ければ多いほど、疲労軽減にも繋がると思われる。

◇AOURの割当定義（AOUR250502）

「〔基本〕」とした定義はAOURで一通り和文入力を行うために最低限習得が必要なものであることを示す。「〔発展〕」とした定義は、必要に応じて段階的に習得すべきものと考えるが、二重母音入力と撥音節入力は、入力の効率が格段に向上するので〔基本〕の定義に準じて必須と考えてもらいたい。

〔基本〕母音

Dvorak配列の母音位置に基づき、【A】【S】【D】【F】【G】の五つのキーに「あ、お、え、う、い」の五つの母音を順に割り当てた。母音は左手ホームポジションに配置される。

愛【AG】、魚【FS】、エイ【DG】、家【GD】

〔基本〕基本的な子音

清音、濁音、半濁音の子音も、Dvorak配列の子音キー位置に基づく。たとえばカ行子音は【I】、タ行子音は【K】となる。入力するときは訓令式ローマ字綴りの要領でこれら子音キーに続けて母音キーを押下する。たとえば「か」は【IA】、「ぬ」は【LF】である。

カ行【I】、サ行【;】、タ行【K】、ナ行【L】、ハ行【J】、マ行【M】、ヤ行【T】、ラ行【O】、
ワ行【W】、ガ行【U】、ザ行【E】、ダ行【H】、バ行【N】、パ行【R】

紙【IAMG】、夢【TFMD】、温もり【LFIFMSOG】、裸【JAHAIA】
仕事【;GUSKS】、プラズマ【RFOAEFMA】、ラジオ【OAEGS】

〔基本〕撥音

撥音「ん」には単独キーで【X】を割り当てた。DvorakではQに相当する位置だが、Qは普通子音に用いず空きになること、AZIKでもQに割り当てられていて撥音キーとして想起しやすかったためである。
撥音は後述の撥音節入力のルールを使うことでほとんど用が足りるようだが、外来語の特殊音で不足する場合や文字列修正字など単独入力が必要になる場合もあると思われる。

余韻【TSGX】、私案【;GAX】、雲母【FXMS】、遠足【DX;SIF】、気温【IGSX】、
インチ【GXKG】

〔基本〕促音

促音「っ」も単独キーとして【Z】を割り当てた。Dvorakでセミコロン位置に相当する。AZIKでも促音がセミコロンキーであることで想起しやすかったためである。
ATOKは仕様で他に割当がない限り同じ子音キーの重ね打鍵で促音が入力されるが、AOURでは重ね打鍵は用いず、常に促音専用キーを用いる。

切手【IGZKE】、明後日【A;AZKE】、納得【LAZKSIF】、札幌【;AZRSOS】、脱兎【HAZKS】、
バックル【NAZIFOF】

〔基本〕長音符号

長音符号「ー」は、JIS配列キーボードではコロン【:】に、US配列キーボードではシングルクォーテーション【'】に割り当てた。（ATOK等の定義ファイルでは双方対応のために両方のキーに割り当てる）
これもAZIKやACTに倣い、右手小指のばし指の位置としたもので、Dvorak配列でもこの位置はマイナス記号キーである。QWERTY配列のように数字【0】の横のマイナス記号キーよりもずっと入力しやすい。
※以下の用例は【:(')】と記述し、JIS配列(US配列)の意である。

カード【IA:(')HS】、チーム【KG:(')MF】、ミートボール【MG:(')KSNS:(')OF】、
アタッカー【AKAZIA:(')】、アンサー【AX;A:(')】

〔基本〕捨て仮名

捨て仮名（いわゆる小書き文字）も、たいていは拗音など他の定義による入力で実現できるが、特殊音などの場合のために、単独で入力が必要になる場合に備え定義を割り当てた。通常のQWERTYローマ字では【L】などに割り当てられているものである。
捨て仮名単独は、【P】を第二子音キーのように用いることとした。子音キーに続けて【P】を打鍵し、たとえば「ょ」ならば【TPS】と入力する。

ゃ【TPA】、ゅ【TPF】、ょ【TPS】、ゎ【WPA】

母音の捨て仮名五つに関しては、ただ【P】に続けて母音キーを打鍵する。

ぁ【PA】、ぃ【PG】、ぅ【PF】、ぇ【PD】、ぉ【PS】

〔基本〕拗音入力

普通のQWERTYローマ字の定義では拗音は子音に続けて【Y】を拗音キーとして押下する。AOURでも当初はDvorakでYに相当する【T】を拗音キーとしたが、後にこのキーは二重母音入力キーの一つとして拗音入力の定義を変更した。
変更後の拗音キーは、子音と同段の右手人差し指キー【U】【J】【M】のいずれかを用いる。子音と重なるガ行、ハ行、マ行については同一キーの連打が必要となる。
たとえば「きゃ」は子音がカ行の【I】なので、同段右手人差し指の【U】を続け、母音の【A】と組み合わせて【IUA】で入力する。「みゅ」は子音が【M】、拗音化キーは同指打鍵【M】、母音は【F】で【MMF】で入力できる。

許可【IUSIA】、ギャル【UUAOF】、距離【IUSOG】、旅客【OUSIAIF】、却下【IUAZIA】、キュート【IUF:(')KS】

〔基本〕拗音入力の例外

シャ行、チャ行、ジャ行については、拗音入力原則の【;J】、【KJ】、【CM】ではなく、拗音キーを含んだ子音キーとして【B】【V】【C】を用いる。拗音キーは用いない。この専用キーの考えはAZIKを参考にした。たとえば「ちょ」は原則の【KJS】ではなく、【VS】の2打鍵で入力する。
Dvorakとの関係では、シャ行はX、チャ行はKと入れ替えたCの位置、ジャ行はJの位置になるので、一応想起しやすいと思う。

社員【BAGX】、茶器【VAIG】、蛇の目【CALSMD】、種目【BFMSIF】、チョコレート【VSISOD:(')KS】、序説【CS;DKF】

〔発展〕外来語特殊音の子音

外来語を書き表したり、特殊な音を表記したりする場合の綴り定義のうち、まずファ行及びヴァ行では清音や濁音・半濁音同様に単独の子音キーを用いることとした。これはDvorakの相当キーがそのまま使えるからである。

ファ行【Y】、ヴァ行【Q】

フィルム【YGOFMF】、ファウル【YAFOF】、ヴィレッジ【QGODZEG】

その他の特殊音は子音キーを二つ、あるいは子音キーと促音キーを用いて母音キーと組み合わせるなどして入力することとした。

・「ウィ、ウォ」などは【WP】＋母音キー
・「ティ、テュ」などは【KP】＋母音キー（「トゥ」「ツァ」などもこの行に含める）
・「ディ、デュ」などは【HP】＋母音キー（「ドゥ」などもこの行に含める）
・「クァ」などは【IP】＋母音キー、「グァ」は【UPA】、「イェ」は【TPD】など

これらは、当初は最初の子音キーの右隣を第二子音キーとして用いようとしたが、捨て仮名が使われるため捨て仮名キー【P】を第二子音キーとして統一することとした。
「ティ」系と「ツァ」行は同一子音キーに共存するため、「ツィ」と「ツォ」は母音が後述の裏打ち側のみにあるという例外的な割当である。

ウォーク【WPS'IF】、ティディベア【KPGHPGNDA】、アクアパッツァ【AIFARAZKPA】、マリトッツォ【MAOGKSZKPL】

〔発展〕二重母音入力

SKY配列、AZIKやACT等の拡張入力方式では、母音が連なる音（「かい、ねい、るい」など）の入力が少ない打鍵で済むように工夫されている。AOURでもこれらに倣い、二重母音入力を割り当てた。QWERTY配列の母音配置では隣接キーに割り当てると覚えづらいものであったが、SKY配列やACTでは母音が片手の中段に並んでいるために、拡張キーも規則的に配置することが出来る。
AOURでも、各母音の上段キーを二重母音入力のキーとした。割り当てる二重母音は、「アイ、オウ、エイ、ウウ、ウイ」の五つとし、【A】【S】【D】【F】【G】母音キー上段の【Q】【W】【E】【R】【T】にこれらを割り当てた。
これにより、たとえば「かい」は【IQ】、「ねい」は【LE】、「るい」は【OT】、のようになる。
なお、これらのキー単独で「アイ」「オウ」等の入力をすることはATOKのカスタマイズ制約などにより実現できない。

公庫【IWIS】、宝物【JWMSKF】、想定【;WKE】、長所【VWBS】、通路【KROS】、更衣室【IWG;GKF】、マイク【MQIF】、チャイム【VQMF】

また、拗音を含んだ二重母音のうち「みゅう、ふゅう」などはほぼ外来語でのみ使うものであると考え、「ミュー、フュー」など長音符号付で定義することとした。

ミュージック【MMREGZIF】、パフューム【RAYRMF】、ウォーム【WPWMF】

〔発展〕撥音節入力

二重母音同様に子音の後に撥音が来る音節（「こん、ぐん、わん」など）の入力が少ない打鍵数で出来るような定義を設ける。これも各母音の下段の5つのキーとし、「アン、オン、エン、ウン、イン」にそれぞれ【Z】【X】【C】【V】【B】を割り当てた。たとえば「こん」は【IX】、「ぐん」は【UV】、「わん」は【WZ】となる。
二重母音入力と同様にこれらのキー単独で「アン、イン」等を入力することは現状では実現できない。

煉瓦【OCUA】、観音【IZLX】、独占【HSIF;C】、シャンソン【BZ;Z】、ウィンドウ【WPBHW】、フォント【YXKS】

〔発展〕拗音裏打ち

ACTでは「ョウ、ュウ」の拗音＋二重母音、「ャク、ュク、ョク、ュツ」が頻出であるとして、これらの入力をしやすくするための省略入力キー定義を設けている。入力打鍵数を減少させ、本則より入力しやすい方法として、AOURでも本則の「裏打ち」として採用させていただいた。
「ョウ」は、二重母音「オウ」用のキーである【W】と左右対称位置にある【O】を、それぞれの子

音キーに続けることで入力できることとした。「ュウ」は二重母音「ウウ」用のキー【R】の左右対称となる【U】とするが、【U】は上段子音の拗音キーでもあるため、上段子音（ファ行の【Y】を除く）を使う場合は例外的にその一つ隣の【Y】としている。

・「ョウ」　子音キー＋【O】
・「ュウ」　子音キー＋【U】又は【Y】

また、「ャク、ュク、ョク」に関しては、途中に「ア、ウ、オ」の母音を含むため、この母音キー【A】【F】【S】と左右対称の【;】【J】【L】を子音キーに続けることとした。
「ュツ」は母音「ウ」を含むが、「ュク」の「ウ」と重複してしまうため、「ュツ」の「ツ」のタ行をイメージするタ行子音キー【K】を、子音キーに続けることとした。

・「ャク」　子音キー＋【;】
・「ュク」　子音キー＋【J】
・「ョク」　子音キー＋【L】
・「ュツ」　子音キー＋【K】

これらの裏打ちによると、たとえば「きょう」は【IO】、「ひゃく」は【J;】のようになる。本則の「きょう」【IUW】、「ひゃく」【JJAIF】よりも入力しやすい。

入浴【LUTSIF】、優勝【TRBO】、省略【BOO;】、供出【IOBK】、芍薬【B;TAIF】、朝食【VOBL】

〔発展〕左手上段子音の裏打ち

子音キーが左手にある行は、母音と同じ側なので左右交互打鍵にならず、打鍵しにくいことがあるので、ワ行（ゐ・ゑ 以外）、ザ行、パ行、ヤ行の各単音については母音と左右対称のキーを代替として割り当て、裏打ちができるようにしてある。わ・を・ぞ・ぜ・ぺ・ぷ・ぴ・ゆ、辺りが裏打ちのほうが打鍵しやすい。
特に、助詞で頻度高く使う「を」も【WS】の裏打ちとして【WL】でも入力できる。
左手子音でもヴァ行は使用頻度が低く、シャ・チャ・ジャ行は拗音裏打ちで対応しているため設定しない。

笑う【W;OAF】、揶揄【T;TJ】、技【W;E;】、ポピー【RLRH'】

〔発展〕促音＋カ・タ行入力

促音「ッ」＋カ行及びタ行、「っか、っき、っく、っけ、っこ、った、っち、っつ、って、っと」は、出現頻度がある程度高いようで、少し後になってこの10の音節に定義を割り当てた。促音＋タ行拡張はgACT10で採用された入力定義（「やって良かった打ち」と呼ばれている）を参考にした。
促音キーは【Z】であるが、割り当て制約等を考え、捨て仮名・小書き文字キー【P】と組み合わせた。

っか【PZ】、っき【PB】、っく【PV】、っけ【PC】、っこ【PX】、った【PQ】、っち【PT】、っつ【PR】、って【PE】、っと【PW】

結果【IDPZ】、復帰【JFPB】、ゆっくり【TFPVOG】、法華【JSPC】、括弧【IAPX】、

切手【IGPE】、
経った【KAPQ】、ナッツ【LAPR】、タッチ【KAPT】、ドット【HSPW】、寿都【;FPR】、
一致【GPT】

〔発展〕促音＋サ・パ行入力

促音＋カ・タ行入力と同様の趣旨で、更に後になってサ行とパ行についても、促音＋各サ行音、促音＋各パ行音、すなわち「っさ、っし、っす、っせ、っそ、っぱ、っぴ、っぷ、っぺ、っぽ」の10定義を追加した。
このルールにおいては、捨て仮名・小書き文字キー【P】の裏打ちキー相当の【Q】と組み合わせた。

っさ【Q;】、っし【QH】、っす【QJ】、っせ【QK】、っそ【QL】、っぱ【QP】、っぴ【QY】、
っぷ【QU】、っぺ【QI】、っぽ【QO】

なお、この定義も当初はカ・タ行と同様に【P】との組み合わせだったが、全て右手打鍵となり打ちにくいため【Q】に変更した。

喫茶【IGQ;】、骨子【ISQH】、キッス【IGQJ】、メッセ【MDQK】、窒素【KGQL】、
葉っぱ【JAQP】、突飛【KSQY】、月賦【UDQU】、フラッペ【JFOAQI】、闊歩【IAQO】

〔発展〕ァク音節入力

「さく、がく、らく」等、ア段子音の次に「ク」が来る綴り（gACT10の「極楽打ち」の一部）についても、これに倣って定義を割り当てた。１音目の子音キー＋カ行子音の【I】という綴りで、読みの子音同士の組み合わせという点で当初は特定定義の一部として位置付けたが、「ァク音節入力」とでも呼ぶことにした。
この定義も少し後になって追加した。ここで割り当てた１音目のア段子音は清音・濁音・半濁音のみであり、「ャク」のように拗音の後に「ク」が来る場合については、前述の「拗音裏打ち」で先行して実装していた。

かく【II】、さく【;I】、たく【KI】、なく【LI】、はく【JI】、まく【MI】、やく【TI】、らく【OI】、
わく【WI】、がく【UI】、ざく【EI】、だく【HI】、ばく【NI】、ぱく【RI】、ファク【YI】

漂白【JOJI】、薬学【YIUI】、淡泊【KZRI】、落語【OIUS】、ファクトリー【YIKSOG:(')】

〔発展〕ァツ音節入力

「さつ、がつ、らつ」等、ア段子音の次に「ツ」が来る綴りについても、定義を割り当てた。１音目の子音キー＋【H】という綴りで、これも読みの子音同士の組み合わせという点で当初は特定定義の一部として位置付けていた。

かつ【IH】、さつ【;H】、たつ【KH】、なつ【LH】、はつ【JH】、まつ【MH】、やつ【TH】、
らつ【OH】、がつ【UH】、ざつ【EH】、だつ【HH】、ばつ【NH】、ぱつ【RH】

札束【;HKANA】、辣腕【OHWZ】、脱衣【HHG】、一月【GKGUH】、奮発【JVRH】

〔発展〕長撥音拡張

外来語などで、長音の後に撥音が来る綴りも、それなりに頻度があるものとして定義を割り当てた。これはUS配列では長音入力キーのシフト付操作【"】キーで入力できる。ただしJIS配列は【｀】とするので、長音キーの一つ上のキーとする。

コーン【IS"】、シーン【;G"】、ムーン【MF"】、ゾーン【ES"】

〔発展〕特定定義

AZIKやACTには、割当の空き部分を利用する形で、「こと、もの、です」などの頻出の綴りを短縮入力できるように割り当てたものがあり、特殊拡張と呼んでいる。当初、このような割当は入力方式の体系や割当の字面の規則性を崩すことになるので敬遠していたが、そもそもAOURもQWERTYキーボードを土台として見たときは字面の規則性は全くない状態になっているので、あまり関係ないだろうとも思い、これもまた先例の入力方式に倣って割り当ててみることにした。
特定定義は、読みの子音同士の組み合わせや、その子音・組み合わせが正規のルールで既に使われているときは近隣キーにずらしたりした。
たとえば、「もの」【ML】、「として」【K;】などがある。

また【MK】、ひと【JK】、にち【LK】

◇AOURの実装方法

AOURは、現在のところ次のアプリケーション用の定義ファイルがあり、それぞれの環境へ実装が可能である。

①ATOK
②Google日本語入力
③DvorakJ
④姫踊子草

スタイルファイル内容、定義ファイルの追加・入れ替えで使えるのはATOKとGoogle日本語入力であるが、MS-IMEなどその他のIMEしか使えない環境では、キー定義カスタマイズのDvorakJや姫踊子草を使うことでAOUR配列が実装できる。
AOURのサイトでは、①ATOKのスタイルファイル内容、②Google日本語入力用ローマ字定義ファイル、③DvorakJ用定義ファイルの三種類の最新版を配布している。

また、DvorakJ用定義ファイルは、DvorakJ本体にも同梱されているが、2022年7月末時点でのDvorakJ最新版が「2014-06-07版」で収録されているAOURの定義ファイルがAOUR111107となっており10年以上前に公開した版であるので、最新版への差し替えを推奨する。
姫踊子草用定義ファイルについては、姫踊子草の公式サイト、研究室において追加配列データとして配布されている。Google日本語入力用定義ファイルから変換されたものであるとのことであるが、こちらも当サイト配布の最新よりずっと前の版と思われる。

以下に環境毎の設定方法を簡単に紹介するが、無論動作運用は利用者自己責任とする。

ATOKでAOUR

AOURは、そもそも自分がATOKでACTのようなDvorak系配列を使いたいが為に考えたものであって、今も自分はIMEはATOKを使っているので、ATOKでAOURを使うのが自分的な「公式」である。（とはいえ、他の方法と差別しているわけではない）
ATOKでAOURを使うには、定義ファイル（ATOKのスタイルファイルのローマ字定義部分）をダウンロードして、既存スタイルファイルを一旦出力した物をテキストエディタで開き、該当部分内容を置き換え、それをATOKに再度読み込ませて追加する。
ATOKは、このスタイルファイルを幾つも追加することが可能で、いつでも任意のスタイルに切り替えることができるので、通常のローマ字入力用の定義とAOURの定義とを同居させ、練習したいとき、使いたいときだけAOURに切り替えて使うこともできる。

Google日本語入力でAOUR

Google日本語入力の開発版にローマ字カスタマイズ機能が追加された頃の段階で、自分はすぐにAOUR用の定義を作ってみた。ATOKより自由度が高く強力なカスタマイズが行える為、既にATOKで実現できているAOURは問題なく実装できた。
また、入力途中の状態表示の仕組みもあり、gACT10での定義ファイルを参考に、同様の表示対応もしてみた。子音のキーを押下した段階で、何行の音を入力しようとしているのかが文字表示される為、習得段階ではATOKより都合が良いかもしれない。ATOKではこれは出来ない。
Google日本語入力でAOURを使うときも、ダウンロードした定義ファイルを読み込ませて追加する。ただし、Google日本語入力は読み込ませて設定できる定義は一つだけなので、初期値の通常のローマ字入力はその段階で使えなくなる。初期設定に戻すことでも元に戻るが、他の設定も戻ってしまう為、デフォルトの定義ファイルを保存しておくほうが無難である。

DvorakJによるAOUR

MS-IMEなど、定義を切り替える方法がない（わからない）場合やカスタマイズができない場合などは、DvorakJという配列定義カスタマイズソフトを使うのが便利である。
DovrakJにAOURを設定して常駐させておけば、通常のローマ字入力状態のIMEでAOURを使うことができる。ATOKなどの場合でも、一時的にAOURを使いたいときにも便利だ。
DvorakJにはデフォルトでもAOURの定義が収録されているが、AOURのサイトで配布している最新の定義ファイルに更新することを推奨する。

なお、最新のMS-IME（Windows 10 Version 2004以降）ではDvorakJが機能しない。この場合は「以前のバージョン」に戻してやらなければならない。

姫踊子草でAOUR

姫踊子草も、DvorakJのような配列カスタマイズソフトであって、定義ファイルを読み込ませることで任意のキー配列に変更することができる。しかし実は、この環境は自分で検証をしていない。
姫踊子草の研究室のページには、追加配列としてAOURを含めた定義ファイルがあるが、同じページに、DvorakJやGoogle日本語入力の定義ファイルから姫踊子草用の定義ファイルに変換するソフトも掲載されている。
つまり、Google日本語入力又はDvorakJの定義ファイルをダウンロードして変換し、読み込ませ

ると、姫踊子草でも最新のAOURが使えるようになるようなのである。
http://h12u.com/hmo2/lab/index.html

◇AOURを使う環境

AOUR使用に適した環境は

AOURを使う為には今のところ以上の４つの方法のうちいずれかを選ぶことになるが、ATOKが使える環境があるのであれば、まずはそれを推奨する。
Google日本語入力をインストールできるなら、２番目としてはそれを推奨する。
Google日本語入力もインストールしたくない、あるいは事情によりこれらをインストールできないという場合、又はMS-IMEしか使いたくないという場合はDvorakJによる方法となる。姫踊子草もDvorakJと同位と考える。

AOURを今後常用していくかどうか決めかねるという場合、習得段階であるうちは元に戻せる環境も用意しておいたほうが良い。ATOKの場合はスタイルファイルを切り替えるだけで元に戻せるが、加えてGoogle日本語入力をインストールし、いずれかをAOUR環境にしておき、ほかは通常のローマ字入力のままにして、適宜切り替えて使うという方法もある。
前述のとおり、Google日本語入力では入力途中で子音キー押下時に状態表示も出るようにしてあるので、習得時はこれを使うほうがATOKよりも良いかもしれない。

AOURが使えるOS

AOURは、前述のとおりATOK、Google日本語入力、DvorakJなどの環境で使えるので、これらが使える環境であればおそらくOSには依存しない。WindowsやMacのほか、Linux系のOSやAndroidでも使える方法があると思っている。
ATOKを搭載している携帯電話、ポメラやテプラ、Google日本語入力環境のスマートフォンなどではローマ字カスタマイズが使えないと思うので、残念ながらAOURは使えない。

どんなキーボードが良いか

AOURを使う為のキーボードとしては、結論的には普通のQWERTY配列のものならどんなものでも良い。AOURの定義はUS配列とJIS配列の両方に対応しているのでJIS配列でもUS配列でも問題ないが、DvorakJの定義では最初にどちらを選択するかの調整が必要など、環境によっては多少作業が必要になる場合もある。

蛇足ながら、AOURを使おうとする人は、それなりに打鍵のことに意識して、より良い環境にしたいという方だと思うので、キーボードにも拘って、メカニカルスイッチや静電容量無接点方式のものなどを使うことを推奨する。
AOURはQWERTY配列のアルファベットとは無関係なので、ブラインドタッチができる方はHHKBの無刻印キーボードを使って習得してみるのも良い。

◆第二章　しっかり覚えるAOUR

第二章は、AOURを理解してしっかり覚えるための説明を中心にする。ブラインドタッチでもっと単純に覚えたい場合は第三章の練習帳のほうが良いかも知れない。

◇AOURの習得、向き不向き

AOURを習得する人には向き不向きがある。
習得に向いているのは、既にローマ字入力を完全習得していて、ブラインドタッチもそれなりにできる人。習得による学習コストと多少の弊害は承知の上で新たな入力方式に切り替え打鍵数を少なくしてみたいという人、Dvorak配列土台の行段系方式をATOKで使ってみたいという人である。

一方、全く初めてキーボードで和文入力を習得しようとするようなパソコンの初心者の人にはお勧めできない。一般的なローマ字入力を先に習得するほうが、周りに教えてもらえる人がいたり、余計なカスタマイズや設定変更もしなくても済むし混同のおそれもないからである。
ただし仮に、全く初めての状態から習得してもローマ字入力よりAOURのほうが習得は速い面もあると思っている。

ブラインドタッチとAOUR

AOURを習得するには、ブラインドタッチは出来たほうが良い。もしそれが出来ない人も、この機に合わせて習得すべきである。AOURは、普通のQWERTY配列キーボードで使うことになるが、キー上面の刻印と定義の音との関係が全くない。説明の都合上、どのキーかを示す為にQWERTYのキー名を使うが、キー名で覚えることは意味がなく、キーの位置と指の動きでで覚えるべきである。（その場合は第三章に基づいた方が良いかも知れない）

習得にかかる期間

AOURの習得期間は個人差があるが、予めブラインドタッチができる人のほうがキーの位置・キーの刻印を気にせず自然と指の動きで覚えることができるので、それなりに早く習得できると思う。
全く初めてAOURで日本語入力を覚えようとする人――いないと思うが――や、かな入力から切り替えようとする人よりも、ローマ字入力を既に習得している人のほうが早く覚えることができるだろうし、AZIK等の二重母音や撥音拡張の意味がわかっている人、その方式を使ったことがある人のほうが更に早いことも間違いない。ACTやDvorakJPなど、他のDvorak系の入力方式を使ったことがある人であれば最も早く習得が可能と思われる。

自分の場合の例で言うと、AZIKでのローマ字入力を数年続けていた状態、ブラインドタッチは完全にできる状態で、基本的な定義を覚えるのに１～２日、１日につき１～２時間の練習として、何とか使えるようになるまで１週間、実用できると感じる段階になるには更に１週間を要した。その辺りで完全にローマ字入力からは切り替えてしまって、２ヶ月から３ヶ月で、多少の速度向上停滞時期もあったものの、４ヶ月も経てばそれなりに高速での入力が実感できるようになった。
ただ、これ自体自分で考案した部分があって、他人より条件が良いという事情は差し引いて考えるべきではある。

入力方式を切り替えるからには、作業の能率が一時的に落ちる。仕事でも使おうとしている場合は、

自宅や仕事外でAOURを十分に習得してから「実践段階」に移行するほうが良い。

◇AOURの使用による弊害

AOURに限らないと思うが、使い慣れたローマ字入力から別の入力方式に切り替えた場合には弊害もあることを予め承知しておかなければならない。

混同

AOURの習得中や習得してすぐに、それまで使っていたローマ字入力との混同は少なからず発生する。特にAOURでは英数字入力時は通常のQWERTY配列なので、今どっちの方式で入力すべきかという混乱が起きやすい。
しかしそれも、AOURをずっと使うことでやがて生じなくなる。自分も今はほとんど混同はなく両方式を使い分けられるが、たまに違う環境で通常のローマ字入力をしばらく使うときや、戻ってAOUR使うときには、両方式の混同は少し起こることがある。

別のパソコン併用

これと関連し、AOURに設定してある自分のパソコン以外に他人のパソコンを使う機会があるときも同様に混同は生じる。十分にAOURを習得した後では他人のパソコンのローマ字入力のもどかしさを感じる。
逆に自分のパソコンを人に触らせる場合にも注意が必要である。触る人はAOURは出来ないし知らないので、和文入力をした途端混乱に陥る。一時的に通常のローマ字入力に戻しておいたり、和文入力の必要が生じたら替わってもらうなどの配慮が必要である。

◇AOURを習得しよう

ここから先は、具体的にAOURを理解しつつ習得する方法を私案として紹介するが、キーボード打鍵教育やブラインドタッチ指南の専門家ではないので、以下の方法が最良な習得方法ではない。指使いの練習を含めて習得したいなら第三章も併せて実践していただきたい。

習得の練習は、経験上１日に１時間から２時間程度、又は１日に一項ずつくらいの進度がちょうど良い。最初のうちは、練習が終わったら元通りローマ字入力などの入力方式に戻ってもよい。
定義を暗唱して覚えるのではなく、キー位置を指で覚えるようにすることが肝要で、各項にある用例は必ず実際に打鍵してみてもらいたい。一通り打鍵してみて感覚を掴み、翌日の練習は前日までのおさらいとして、これまで出てきた用例の打鍵を毎日繰り返していくとなお早く習得できると考える。

AOURの盤面図と定義一覧

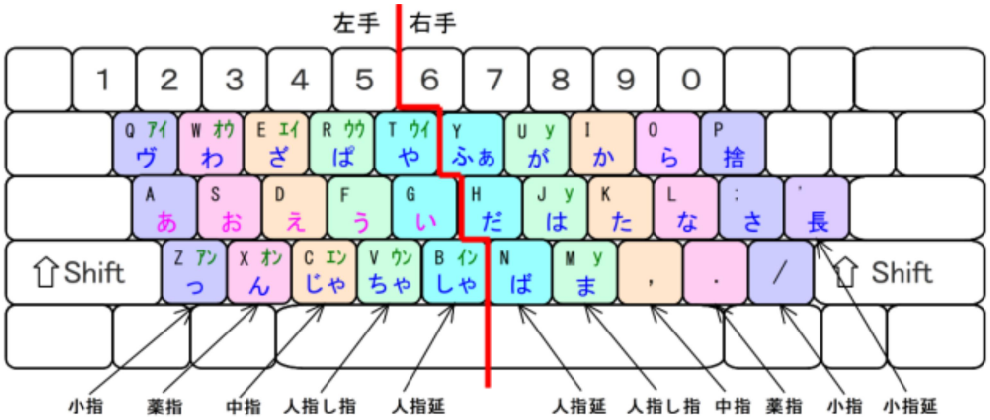
AOURの習得に当たり、手元に常に置いておいてほしいのがAOURの盤面図である。これを参照すると、AOURの基本的な入力と基本的な拡張入力の定義が確認できるようになっているつもりである。
盤面図は、この文書第一章の盤面図でも、次の図でも良い。可能ならどちらかを印刷して習得するまで手元に置いておくのが良い。

定義一覧も、AOURのサイトから入手して手元にあると良い。

初期定位置（ホームポジション）と各指担当キー

AOURを習得するのに、ブラインドタッチの技術はあったほうが良いと前述したとおり、一般的な打鍵練習の場合と同様に、キーボードの【F】と【J】に左右の人指し指を乗せ、そこから外側方向に一つずつ中指薬指小指を各キー乗せた状態を定位置とする。すなわち、【A】に左小指、【S】に左薬指、【D】に左中指、【F】に左人指し指、【J】に右人指し指、【K】に右中指、【L】に右薬指、【;】に右小指という状態で、これが練習を始めるときの開始位置である。

また、標準的なブラインドタッチでは各キーの担当指が決まっている。次の図で確認をしておいてほしい。人指し指の担当キーがそれぞれ６個で一番役割が大きい。
数字キーに触れていないのは、AOURの入力に無関係であるのと、実際自分も数字のブラインドタッチは怪しい部分もあるからである。



既にブラインドタッチができる人にとっては当たり前のことと思うが、そうでない場合、以下の説明項目に基づいて打鍵の練習をするときは、必ず担当指で打鍵する癖をつけるようにしていただきたい。

「あいうえお、小指ヒトヒト中クスリ」

まずはAOURにおける母音を習得する。
盤面図の左手ホーム部分を見ていただきたい。「あいうえお」の順に目で追っていくと、キーは【A】【G】【F】【D】【S】の順で、指は小指、人指し指、人指し指、中指、薬指という順になる。見出しのとおり「あいうえお、小指ヒトヒト中クスリ」で、この五七五を唱えながら打鍵し、しばらく「あいうえお」の練習をしてほしい。

読み入力の状態でこれらキーはそれぞれ打鍵すると「あ、い、う、え、お」が入力されるはずである。入力されなければ、それはAOURが使える状態になっていないということである。
「あいうえお」の母音五つが確実に入力できるようになったら、次の単語で入力練習をする。

愛【AG】、青【AS】、上【FD】、エイ【DG】、甥【SG】、王【SF】、家【GD】、 言う【GF】、ウエア【FDA】

ローマ字の綴りと同様に、この五つの母音は、各子音キーに続けて押下することでその行の音を入力する。つまり全ての音の基礎になっているのがこの五つの母音である。

二重母音入力は左手上段

母音の後は子音、という順に覚えるのが良いかと思ったが、それでは習得効率が悪い。子音より先に母音に準ずる拡張入力定義の母音型キーを覚えるほうが良い。
拡張入力は、覚えなくても和文入力には問題がないが、打鍵数減少による効率化、打鍵の疲労軽減の可能性を高める為には習得が必須と考える。
他の拡張入力方式でも同じだが、そもそも拡張的な定義を覚えなければ、このAOURを使う意味も薄れるのである。

そこで母音の次に、二重母音入力キーを習得すべきだ。
二重母音とは、「かい、ねい、るい」など、音をローマ字で書いたときに母音が重なるような類型のことで、具体的には子音に続けて「ai、ui、uu、ei、ou」となる五つの二重母音にキーを割り当ててある。
これらは、それぞれ「あi、uい、うu、えi、おu」のように各母音を含む為、母音キーのすぐ上段のキーを割り当ててある。
すなわち「あi【Q】、uい【T】、うu【R】、えi【E】、おu【W】」である。

これらのキーは各子音キーに続けて押下することで「かい、ねい、るい」などの二重母音の類型を入力することができるが、単独で押下した場合は意味を成さず、別の割当の子音キーとして動作する。
他の類似方式では単独で押下して「あい、うい、うう、えい、おう」の母音に続く二重母音の類型を入力する割当があるが、AOURはそうなっていない。このような場合は各母音キーで対応する必要がある。
従って、ここでは打鍵の練習をするのではなくキーの位置を覚えるだけとし、各母音のその上段とだけ覚えておけば、理屈的にはさほど迷いはないはずである。

撥音節入力は左手下段

二重母音入力に続いて、次は撥音節入力キーである。
撥音節入力とは、「こん、ぐん、わん」など、子音に続いて発音「ん」がある類型だ。これも具体的には「あん、いん、うん、えん、おん」の五つで、それぞれの母音のすぐ下段のキーを割り当ててある。
すなわち「aん【Z】、iん【B】、uん【V】、eん【C】、oん【X】」である。

これらのキーも各子音キーに続けて押下することで「こん、ぐん、わん」などの類型を入力することができるが、やはり単独で押下しても意味を成さず、別の割当のキーとして動作したりする為、この

段階では打鍵の練習ではなくキーの位置のみ覚えてほしい。
また、やはりこれらキーについても、「あん、いん、うん、えん、おん」の母音に続く撥音の類型には対応していないので、この場合は母音キーに続けて次の撥音単独キーを押下して入力する。

単独の撥音

撥音節入力の説明で、母音に続く撥音には対応していないと述べた。そういう場合は「ん」を入力する手段が必要である。稀に「ん」だけ入力することもあるかもしれない。その為、撥音「ん」を単独で入力するのに左手薬指下段の【X】を割り当ててある。
単独キーなので【X】を押下すると「ん」が入力される。このキーは、子音キーに続けて押下すると撥音節「oん」の役割にもなっている。
ひとまず、以下の語などで打鍵しキーの位置を把握してほしい。
正しい指で打鍵することを忘れずに。

案【AX】、音【SX】、員【GX】、運【FX】、円【DX】

清音・濁音・半濁音の子音キー

母音と二重母音・撥音節入力を覚えたところで、いよいよそれらキーを使うための子音キーを組み合わせながら習得する。

カ行、右手中指上段

カ行子音キーは右手中指上段の【I】である。
これから子音キーを習得するときは、そのキーだけを覚えるのではなく、母音との組み合わせで感覚的に習得するのが良い。更には子音＋母音の五つだけではなく、二重母音や撥音拡張と共に、１５の定義を一緒に覚えるべきである。

か【IA】、き【IG】、く【IF】、け【ID】、こ【IS】 かい【IQ】、くい【IT】、くう【IR】、けい【IE】、こう【IW】 かん【IZ】、きん【IB】、くん【IV】、けん【IC】、こん【IX】

それぞれの練習が出来たら、次のような単語でも練習をしてみてほしい。

赤【AIA】、顔【IAS】、気温【IGSX】、下降【IAIW】、鬱金【FIX】

実際に打鍵してみるとわかると思うのだが、母音、二重母音、撥音節入力のキーは全て左手側に整理されているので、覚えるのに大きな苦労は要らないだろうと予想できる。

サ行、右手小指のセミコロン

サ行子音キーは、右手小指ホームの【;】セミコロンのキーである。英字ではないので変な感じもするが、割当の制限が厳しいATOKでもこのキーに子音を割り当てることはできている。
サ行以下は、前のカ行同様に次の１５の定義を順に習得していってほしい。

さ【;A】、し【;G】、す【;F】、せ【;D】、そ【;S】 さい【;Q】、すい【;T】、すう【;R】、せい【;E】、そう【;W】 さん【;Z】、しん【;B】、すん【;V】、せん【;C】、そん【;X】

※ATOKで、サ行子音【;】がそのまま表示されてしまいサ行の入力が出来ないときは、「ローマ字立ち直り」の設定が「しない」以外になっているか確認してもらいたい。

十分に覚えたら、既に覚えたはずのカ行や母音と組み合わせて次のような単語を練習してみると良いだろう。

押す【S;F】、傘【IA;A】、参加【;ZIA】、司会【;GIQ】、高速【IW;SIF】

ローマ字入力では、「し」を入力するのにヘボン式の「SHI」と訓令式「SI」の二つがあるが、AOURでは上記の【;G】のみである。

タ行、右手中指定位置

タ行子音キーは、定位置で右手中指をそのまま打鍵する【K】である。
カ行・サ行同様に１５の定義を練習したら、その下の単語などで更に練習してほしい。

た【KA】、ち【KG】、つ【KF】、て【KD】、と【KS】
たい【KQ】、つい【KT】、つう【KR】、てい【KE】、とう【KW】
たん【KZ】、ちん【KB】、つん【KV】、てん【KC】、とん【KX】

下【;GKA】、タスク【KA;FIF】、諭す【;AKS;F】、炭鉱【KZKW】、混沌【IXKX】

「ち」や「つ」に関してもローマ字入力では、ヘボン式と訓令式二つの割当があるが、AOURでは訓令式の考えに基づいた上記の定義のみである。

ナ行、右手薬指定位置

ナ行子音キーは、タ行の【K】の隣で、右手薬指定位置の【L】である。
練習語としては次のようなもの。

な【LA】、に【LG】、ぬ【LF】、ね【LD】、の【LS】
ない【LQ】、ぬい【LT】、ぬう【LR】、ねい【LE】、のう【LW】
なん【LZ】、にん【LB】、ぬん【LV】、ねん【LC】、のん【LX】

蟹【IALG】、中州【LAIA;F】、彼方【IALAKA】、難航【LZIW】、観念【IZLC】

ハ行、右手人指し指定位置

ハ行の子音キーは、右手人指し指定位置の【J】のキーである。たいていのキーボードには定位置に指を置く目印として小さな突起がついてる。

は【JA】、ひ【JG】、ふ【JF】、へ【JD】、ほ【JS】
はい【JQ】、ふい【JT】、ふう【JR】、へい【JE】、ほう【JW】
はん【JZ】、ひん【JB】、ふん【JV】、へん【JC】、ほん【JX】

花【JALA】、久しく【JG;A;GIF】、下手【JDKA】、深い【JFIQ】、偏見【JCIC】

ローマ字入力では、「ふ」もヘボン式の「FU」と訓令式「HU」の割当があるが、AOURでは「HU」に相当する【JF】のみで、後に習得するファ行の子音キーとの組み合わせ【YF】で「ふ」は入力できない。

マ行、ローマ字共通M

マ行の子音キーはローマ字入力と共通の【M】であるから、共通であるということだけ覚えておけば良い。右手人指し指下段である。

ま【MA】、み【MG】、む【MF】、め【MD】、も【MS】 まい【MQ】、むい【MT】、むう【MR】、めい【ME】、もう【MW】 まん【MZ】、みん【MB】、むん【MV】、めん【MC】、もん【MX】

薪【MAIG】、美奈子【MGLAIS】、昔【MFIA;G】、聡明【;WME】、関門【IZMX】

ヤ行、左手人指し延ばし指

ヤ行の子音キーは、これまでと違い左手である。人指し指上段延ばしの【T】。
この子音キーは人指し指を伸ばして打鍵する位置にあるので、定位置から左手全体がずれやすい。十分練習してキーの位置の感覚を掴んでほしい。
ヤ行にはイ段とエ段が無いので、覚える定義は少し少ない。

や【TA】、ゆ【TF】、よ【TS】 やい【TQ】、ゆい【TT】、ゆう【TR】、よう【TW】 やん【TZ】、ゆん【TV】、よん【TX】

山【TAMA】、浴衣【TFIAKA】、吉野【TS;GLS】、有効【TRIW】、リヨン【OGTX】

ラ行、右手薬指上段

ラ行の子音キーは、右手薬指上段の【O】である。ローマ字の母音キーなので、慣れがあり比較的打鍵はしやすいと思う。

ら【OA】、り【OG】、る【OF】、れ【OD】、ろ【OS】 らい【OQ】、るい【OT】、るう【OR】、れい【OE】、ろう【OW】 らん【OZ】、りん【OB】、るん【OV】、れん【OC】、ろん【OX】

理科【OGIA】、鱈【KAOA】、ライト【OQKS】、冷夏【OEIA】、反論【JZOX】

ワ行、これもローマ字共通

ワ行の子音キーもローマ字と共通で【W】であるので特に迷いなく習得できるだろう。左手薬指上段である。
ワ行のイ段とエ段には、それぞれ「ゐ」と「ゑ」を割り当てている。あまり使わないかもしれないが。
ワ行は二重母音や撥音節入力の類型がほとんど無い。

わ【WA】、ゐ【WG】、ゑ【WD】、を【WS】
わい【WQ】
わん【WZ】

綿【WAKA】、これをもらう【ISODWSMSOAF】、ワイン【WQX】、若い【WAIQ】、お椀【SWZ】

ガ行、右手人指し上段

濁音・半濁音の行についても清音の行と考え方に変わりはない。ガ行の子音キーは右手人指し指上段の【U】である。

が【UA】、ぎ【UG】、ぐ【UF】、げ【UD】、ご【US】
がい【UQ】、ぐい【UT】、ぐう【UR】、げい【UE】、ごう【UW】
がん【UZ】、ぎん【UB】、ぐん【UV】、げん【UC】、ごん【UX】

戯画【UGUA】、家具【IAUF】、髭【JGUD】、迎合【UEUW】、権化【UXUD】

ザ行、左手中指上段

ザ行の子音キーも母音と同じ左手側である。中指上段の【E】を使う。

ざ【EA】、じ【EG】、ず【EF】、ぜ【ED】、ぞ【ES】
ざい【EQ】、ずい【ET】、ずう【ER】、ぜい【EE】、ぞう【EW】
ざん【EZ】、じん【EB】、ずん【EV】、ぜん【EC】、ぞん【EX】

柘榴【EAIFOS】、時刻【EGISIF】、人数【LBER】、自家製【EGIA;E】、税金【EEIB】

この行にある「じ」に関しても、ローマ字入力ではヘボン式・訓令式で二つ割当があるが、AOURでは上記の【EG】一つのみ。

ダ行、右手人指し延ばし

ダ行の子音は、右手人指し指延ばしの【H】である。

だ【HA】、ぢ【HG】、づ【HF】、で【HD】、ど【HS】
だい【HQ】、づい【HT】、づう【HR】、でい【HE】、どう【HW】
だん【HZ】、ぢん【HB】、づん【HV】、でん【HC】、どん【HX】

髑髏【HSIFOS】、打刻【HAISIF】、新妻【LGGHFMA】、打鍵【HAIC】、鈍行【HXIW】

バ行、右手人指し延ばし下段

バ行の子音は、右手人指し指下段の【N】である。ローマ字入力で使う【B】のすぐ隣であるので、

最初のうちは混同するかもしれない。

ば【NA】、び【NG】、ぶ【NF】、べ【ND】、ぼ【NS】
ばい【NQ】、ぶい【NT】、ぶう【NR】、べい【NE】、ぼう【NW】
ばん【NZ】、びん【NB】、ぶん【NV】、べん【NC】、ぼん【NX】

場数【NAIAEF】、語尾【USNG】、ベトナム【NDKSLAMF】、米価【NEIA】、
煩悩【NXLW】

パ行、左手人指し上段

パ行の子音は左手側にあり、人指し指上段の【R】である。母音系の各キーも左手なので、左手だけの打鍵となる。

ぱ【RA】、ぴ【RG】、ぷ【RF】、ぺ【RD】、ぽ【RS】
ぱい【RQ】、ぷい【RT】、ぷう【RR】、ぺい【RE】、ぽう【RW】
ぱん【RZ】、ぴん【RB】、ぷん【RV】、ぺん【RC】、ぽん【RX】

パリ【RAOG】、コピペ【ISRGRD】、パイン【RQX】、寒風【IZRR】、ピンポン【RBRX】

のばし棒、長音符号の入力

パ行まで来たところで、カタカナ語で使う「ー」長音符号、のばし棒記号はどのように入力するかをこの段階で習得する。長音符号は右手ホームの小指を右に一つずらした位置、小指延ばしの位置のキーに単独で割り当てている。
JIS配列キーボードなら【:】、US配列キーボードなら【'】である。AOURの定義には、この両方に割り当ててあるので、JIS配列を使っているときにかな漢字変換状態で【'】を打鍵すると「ー」が入力されてしまう。逆にUS配列キーボードでのかな漢字変換時に【:】でも「ー」が入力されてしまう。この為、これら記号を全角で入力するにはIMEに単語登録をするなどが必要になる。

以下の説明での標記では、長音符号入力を【:(')】のように記載する。これは括弧内はUS配列キーボードの場合、という意味である。

ローズ【OS:(')EF】、ピース【RG:(');F】、キーボード【IG:(')NS:(')HS】、
ローレライ【OS:(')ODOQ】

単独の、促音「っ」

促音の「っ」については、ローマ字入力では子音キーを重ねることにより入力できるようになっているが、AOURではそういう割当はなく、単独キーを割り当てている。キーは左手小指下段の【Z】で、このキーを押下すると「っ」が入力できる。

切符【IGZRF】、札幌【;AZRSOS】、ラップトップ【OAZRFKSZRF】、
ナップザック【LAZRFEAZIF】

ATOKにおけるローマ字入力でも子音を重ねると「っ」という定義が基礎にあるようで、AOURに

定義を変更しても、無意味に子音を重ねて打鍵すると意図せず「っ」が出現することがある。これは、AOURを使う為にローマ字立ち直りを「する」又は「自動」に設定することに関係するが、「しない」に設定すると前述のとおりサ行子音を認識しないので、ここは仕様ということでご理解願う。

また、促音「っ」に続けてカ行、サ行、タ行、パ行が来る場合、すなわち「っか、っす、っち、っぱ」などの類型に対しては、打鍵数を減少させる方式も用意してあり、後で項目を立てる。

単独子音キーを持つ外来語特殊音

和文入力では、カタカナ語も多く使うので、「ファイト」や「ウィンドウズ」などに使う外来語の特殊音の綴り、入力方法も覚えておいたほうが良い。説明順の都合上ここで紹介しているが、AOURの定義をとりあえず一通り早く習得したい場合は、この一連の外来語特殊音の項は少々後回しでも良いかもしれない。

ファ行、右手人指し延ばし上段

外来語特殊音の中でも、「ファミコン、フォルム」など、ファ行は割と頻度高く使われるだろう。
ファ行の子音は右手人指し指上段延ばしの【Y】である。

ふぁ【YA】、ふぃ【YG】、ふゅ【YF】、ふぇ【YD】、ふぉ【YS】
ふぁい【YQ】、ふぉい【YT】、ふゅー【YR】、ふぇい【YE】、ふぉー【YW】
ふぁん【YZ】、ふぃん【YB】、ふぇん【YC】、ふぉん【YX】

このファ行もそうだが、外来語特殊音の類型では、使われる状況に鑑みて清音・濁音と違った類型を登録している場合がある。ファ行の例で言うと、【YT】は「ふゅい」ではなく「ふぉい」、【YR】は「ふゅう」ではなく「ふゅー」、【YW】は「ふぉう」ではなく「ふぉー」としている。
また、本来有るべき「ふゅん【YV】」は出現頻度が低いものであると考え定義していない。ATOKの定義可能数に余裕が無いことにも関係し、今後の改編で登録有無を選択扱いにする場合もある。
この辺りの定義の有無は、定義一覧表で確認しておいてほしい。

ファクシミリ【YAIF;GMGOG】、フェンシング【YC;BUF】、フォント【YXKS】

ヴァ行、左手小指上段

カタカナでしか使えないヴァ行の各音は、母音側の左手小指上段の【Q】に割り当てている。

ヴァ【QA】、ヴィ【QG】、ヴ【QF】、ヴェ【QD】、ヴォ【QS】
ヴァイ【QQ】、ヴォイ【QT】、ヴー【QR】、ヴェイ【QE】、ヴォー【QW】
ヴァン【QZ】、ヴィン【QB】、ヴン【QV】、ヴェン【QC】、ヴォン【QX】

ヴァイオリン【QQSOB】、ヴォーカル【QWIAOF】、ヴィーナス【QG:(')LA;F】

２打鍵子音キーを持つ外来語特殊音

外来語特殊音に至ると、ファ行やヴァ行のようにそもそもローマ字での割当があったもの以外については、単独の子音キーではなく二つのキーを打鍵する２打鍵子音キーとしている。

「ウィンドウ」や「ウォーキング」などに使う「ウ＋ィェォ」の一連は、左手上段の薬指と後述の小書き文字用キーを使い、【WP】を子音とする。この２打鍵の後に母音や拡張キーを押下する。

ウィ【WPG】、ウェ【WPD】、ウォ【WPS】
ウェイ【WPE】、ウォー【WPW】
ウィン【WPB】、ウォン【WPX】

ウィンドウズ【WPBHWEF】、ウェイト【WPEKS】、ウォーキング【WPWIBUF】

ティ・テュ、ツァ行やディ・デュ

ティやディは割と頻度高く使われると思う。ローマ字入力でも、たいていティやテュに割当がある。AOURでは、ティやテュ、ツァやツェは【KP】を子音キーとして使い、ディやデュは【HP】を子音キーとして使う。ツィとツォの母音キーは、割当の関係で左右対称位置（裏打ち側）にある点には注意を要する。

てぃ【KPG】、てゅ【KPF】、とぅ【KPS】
ツァ【KPA】、ツィ【KPH】、ツェ【KPD】、ツォ【KPL】
てゅー【KPR】、とぅー【KPW】、てぃん【KPB】
でぃ【HPG】、でゅ【HPF】、どぅ【HPS】
でゅー【HPR】、どぅー【HPW】、でぃん【HPB】

テディベア【KDHPGNDA】、ツァラトゥストラ【KPAOAKPS;FKSOA】
ディンプル【HPBRFOF】、ディーラー【HPG:(')OA:(')】

このほか、「クァ」行（【IP】＋母音）、「グァ」【UPA】、「イェ」【TPD】などの割当もある。必要に応じて一覧表等で確認してもらいたい。

拗音は子音同段右人指し指

ローマ字入力においては、「きゃ、にゅ、みょ」などの拗音を入力する場合、子音に続けて拗音キーとして【Y】のキーを押下し、その後母音のキーを押下する３打鍵の方式である。AOURにおいても基本は同じで、子音キーに続けて拗音キーを押下し、その後母音や二重母音・撥音節入力キーを押下するという３打鍵が基本である。

ただしAOURの拗音キーは、ローマ字入力の【Y】のように単一のキーに固定されていない。子音キーと同段の右人指し指キーで、【U】【J】【M】のいずれかである。子音により拗音キーが異なる。

【U】を使う子音……カ行【I】、ラ行【O】、ガ行【U】、パ行【R】
【J】を使う子音……ナ行【L】、ハ行【J】、ダ行【H】
【M】を使う子音……マ行【M】、バ行【N】

外来語特殊音に関しては、最初から拗音的要素を含んでいるので拗音キーは使用しない。

拗音の類型は各行それぞれで多いので全行全てを羅列はしないが、カ行を例に取ると、次のような類

型である。

きゃ【IUA】、きゅ【IUF】、きぇ【IUD】、きょ【IUS】
きゃい【IUQ】、きゅい【IUT】、きゅう【IUR】、きぇい【IUE】、きょう【IUW】
きゃん【IUZ】、きゅん【IUV】、きぇん【IUC】、きょん【IUX】

虚無【IUSMF】、客【IUAIF】、進入【;BLJR】、開闢【IQNMAIF】

拗音要素を含んだ外来語特殊音に至ると、行によっては、それに相当する音を使う場面がほとんど考えられない為に部分的に割当を行っていないものもある。

拗音の例外シャ・チャ・ジャ行

上の拗音化キーのところで、サ行、タ行、ザ行の拗音がない。これらの行の拗音は、「しゃ、ちゃ、じゃ」等であるが、この三つの行の拗音に関しては、拗音化キーを含んだ子音として、それぞれ【B】【V】【C】を割り当てている。つまり、シャ・チャ・ジャ行の音については外来語特殊音と同様に拗音化キーを用いないのである。

喜寿【IGCF】、茶の湯【VALSTF】、車掌【BABW】、チェンマイ【VCMQ】、春秋【BVCR】

拗音を含んだ頻出の綴り

「きょう、きゅう、きゃく、しゅく、しゅつ」など、拗音の「ゃゅょ」＋「う・く・つ」の類型で「ょう、ゅう、ゅく、ゅつ、ゃく」は頻出するものとして、拗音を持つ行のそれぞれの類型に個別に定義を割り当てている。
拡張的入力の発想の多くは基礎としたACTに倣っているが、これもその一つだ。

具体的には、子音キーに続けて「ょう【O】、ゅう【U】又は【Y】、ゅく【J】、ゅつ【K】、ゃく【;】」のキーを打鍵する。類型が各行で異なり、少し多いので定義一覧表で確認してほしい。例としては次のようになっている。

きょう【IO】、きゅう【IY】、しゅう【BU】、しゅく【BJ】、しゅつ【BK】、きゃく【B;】

「ょう」の【O】は、二重母音「おう」の【W】の左右対称位置である。「ゅう」の【U】は二重母音「うう」の【R】の対称位置【U】であるが、上段子音の拗音化キーでもあり競合するため、上段子音（ファ行の【Y】を除く）の「ゅう」はその隣の【Y】である。「ゅく」の【J】は含まれる母音ウ【F】の対称位置。「ゅつ」の【K】はタ行音が含まれるのでタ行の子音。「ゃく」の【;】はア行音が含まれることから、母音アの【A】の対称位置としたが、こう書くとわかりにくいかもしれない。
この辺りは拡張的な入力であるので、余裕に応じて覚えてもらいたい。
外来語特殊音は「どぅう」ではなく「どぅー」としていたり、例外も混じる。

供給【IOIY】、客室【I;;GKF】、三百【;ZN;】、丘陵地【IYOOKG】

「ファクシミリ」は通常の打鍵だと【YAIF;GMGOG】で10打鍵だが、この省力入力を使うと上記の例のとおり８打鍵で済む。

捨て仮名は右上小指のP

「ぁぃぅぇぉ」など小書きの文字も、会話文の中などで使用することがあるだろう。余程特殊な類型では拗音で使う「ゃゅょゎ」も単独で入力できる手段があったほうが良いのかもしれないと思い、入力方法を用意してある。
これは右手小指上段の【P】を捨て仮名キーとして用い、次のように入力する。

ぁ【PA】、ぃ【PG】、ぅ【PF】、ぇ【PD】、ぉ【PS】
ゃ【TPA】、ゅ【TPF】、ょ【TPS】、ゎ【WPA】

なお、AOURでは「ヵ」「ヶ」の割当は用意していない。

促音＋カ・サ・タ・パ行入力

促音「っ」のところでも少し書いたが、「っ」に続けてカ行、サ行、タ行、パ行が来る場合、拡張入力で打鍵数を減少させる割当がある。出現頻度がそれなりにあると考えたからである。促音＋カ・サ・タ・パ行入力と名付けている。
具体的には捨て仮名キーを活用する。捨て仮名キーを「っ」の入力に見立て、続けて母音キー的な配置でそれぞれのキーを押下する。サ・パ行については捨て仮名キーの裏打ちキーを使用する。
たとえばカ行の場合の定義はこのような感じである。

っか【PZ】、っき【PB】、っく【PV】、っけ【PC】、っこ【PX】

２打鍵目のキーは、撥音節入力で使う一連のキーと共通であって、第１打のキーが【P】の場合はこのようになる。仮名が持つ母音のすぐ下段の位置ということで覚える。

タ行の場合は、２打鍵目のキーは左手上段の各キーで、これは二重母音入力のキーと同一である。無論これも、各仮名が持つ母音のすぐ上の段ということで覚える。

った【PQ】、っち【PT】、っつ【PR】、って【PE】、っと【PW】

サ行とパ行については、「っ」に相当するキーを【Q】とし、頻出拗音の裏打ちと同様に、左手の母音と対象の右手側キーを割り当てる。

っさ【Q;】、っし【QH】、っす【QJ】、っせ【QK】、っそ【QL】
っぱ【QP】、っぴ【QY】、っぷ【QU】、っぺ【QI】、っぽ【QO】

「あいうえお、小指ヒトヒト中クスリ」の右手版ということで考え、右手小指がア段、人指し指延ばし指がイ段、人指し指がウ段、中指がエ段、という並びになっている。

立夏【OGPZ】、抱っこ【HAPX】、寿都【;FPR】、喫茶【IGQ;】、法被【JAQY】

タ行が左手上段なのは【T】があるから、サ行は【;】があるから、パ行は右手上段に【P】があるから、と自分は想像して定義した。

これにより、たとえば「札幌」を通常入力すると【;AZRSOS】と７打鍵だが、この拡張を使うと【;

AQOOS】の６打鍵で済む。

ア段２音目に「く」か「つ」

「ア段の音＋く」の類型は、各行子音キーの次の2打鍵目にカ行の子音キー【I】を入力する子音キー同士の組み合わせによって実現している。比較的多い2音目に「ァク」音節も一通りこの定義で入力できるようにした。「ア段の音＋つ」の類型も、子音は【H】を用いて入力できるようにした。

さく【;I】、なく【LI】、がく【UI】、ばく【NI】……など
かつ【IH】、まつ【MH】、だつ【HH】……など

頭角【KWII】、巧み【KIMG】、押捺【SFLH】、溌剌【JHOH】、殺伐【;HNH】、幕末【NIMH】

特定定義における幾つかの類型

AOURにおける定義は以上であるが、この他に特定定義として頻出類型に定義を割り当てているものがある。例えば「こと【IK】、にち【LK】、です【H;】、ひと【JK】、ます【M;】」のように、類型の各子音キーの組み合わせによる定義である。従って、定義できる数も限られていて、定型化しているものでもない。

特定定義は必要に応じて適宜習得する程度でよい。混同・混乱を招かないためには「おまけ」として完全に無視しても良い。

この後の練習法

以上で、基本と拡張を含め、AOURの一連の定義を概ね説明した。
ローマ字入力よりは確実に覚えることは多いが、拡張的入力まで含めて全て習得すると、ローマ字入力よりは確実に快適な入力ができるようになると思う。
ここまで一通り定義を覚えながら用例で練習したら、この後は練習・実践あるのみである。
練習方法の一つとしては、思いついた短文の入力をどんどん行う。定義を忘れたり間違えたりしたら定義一覧等で確認し、正しい定義で再入力を行い、とにかく指にAOURを覚えさせる感覚である。
短文から、次第に長文の入力も行っていく。
キーの定義綴りを見て、どんな文字列が入力されるかを予想するのも効果がある。
たとえば定義綴りを見てどの指でどう打鍵するかをまず考え、出力結果を予想してみてほしい。拡張入力や省力入力、一部で特定定義も含んでいる。

【JQODKF】（　　）　【SIAEF】（　　）　【NCKW】（　　）
【;AMGHAOD】（　　）　【HCRAHSIE】（　　）
【MAF;FRAZHS】（　　）　【IEKQHCWA】（　　）
【MDMSVO】（　　）　【HC;GKANAIS】（　　）
【RFOAEFMAIFOA;FKA:(')】（　　）　【;IO;】（　　）
【DIGBO】（　　）　【IWO;NX】（　　）　【CF:(');F】（　　）
【AIF;D;GNGOGKLG】（　　）

実は、この方法はAOURに慣れてしまうと、頭ではなく指の動きで定義を覚えている為、綴りからその結果を考えることは逆に難しいのである。

◆第三章　AOUR打鍵練習帳

第一章の割当定義解説は母音・子音、撥音や促音、拡張入力の順で、第二章の習得でも、母音や子音の基本部分から入るなど、定義の重要度に基づいた練習になっていた。
第三章では、過去に自分がブラインドタッチを覚えた時の方法を思い出し、この順でやっていったらAOURはもっと習得しやすいのではないかと、簡易に練習ができるように適した定義の例を考えてみた。
AOURの基本や拡張の法則は、前章までで概ね先に理解している前提で進めてもらうことを想定している。

つづり【KFHFOG】のように、【 】の中がキーの定義・つづりである。
【:(')】となっているところは、JIS配列(US配列)の意である。

ここでも盤面図（第２章の図など）を印刷して手元に置きながら練習すると良い。

◇左手中段(母音)

最初は、左手中段の練習。AOURでは左手中段は母音である。ローマ字入力では母音のあいうえおから練習することが多いが、配列が左右に分散しているので最初から習得が困難な面もある。AOURではDvorak配列に基づき母音が並んでいるので母音から練習することが合理的である。

あい【AG】、いえ【GD】、あお【AS】、えい【DG】、おう【SF】、うえ【FD】、えあ【DA】、
あおい【ASG】、うえあ【FDA】、あいうえお【AGFDS】

◇右手中段(子音と長音)

次は右手中段の練習。ここは、ハ行、ダ行、タ行、ナ行、サ行の子音と、長音符号がある。左手ホームの母音に続けて、右手のホームも習得する。

ふ【JF】、ひふ【JGJF】、はふ【JAJF】、はひふへほ【JAJGJFJDJS】
ど【HS】、づ【HF】、だぢづでど【HAHGHFHDHS】
ふで【JFHD】、はだ【JAHA】、だほ【HAJS】、だは【HAJA】、では【HDJA】、
ほど【JSHS】

た【KA】、と【KS】、たち【KAKG】、つた【KFKA】、てつ【KDKF】、
たちつてと【KAKGKFKDKS】
ひと【JGKS】、はた【JAKA】、ふた【JFKA】、ただ【KAHA】、でた【HDJA】、
たひち【KAJGKG】

に【LG】、なの【LALS】、なに【LALG】、ぬの【LFLS】、のに【LSLG】、
なにぬねの【LALGLFLDLS】、
にふだ【LGJFHA】、なは【LAJA】、にど【LGHS】、つの【KFLS】、ひので【JGLSHD】、
たねだ【KALDHA】、とね【KSLD】

そ【;S】、しさ【;G;A】、ささ【;A;A】、すし【;F;G】、せつ【;DKF】、
さしすせそ【;G;G;F;D;S】
なし【LA;G】、そと【;SKS】、せた【;DKA】、だす【HA;F】、とさ【KS;A】、
てにす【KDLG;F】、しのだ【;GLSHA】

さーど【;A:(')HS】、でーと【HS:(')KS】、とーち【KS:(')KG】、のーど【LS:(')HS】、
ぬーど【LF:(')HS】
さお【;AS】、あした【A;GKA】、あだち【AHAKG】、うだつ【FHAKF】、あいだ【AGHA】、
しうち【;GFKG】、さなえ【;ALAD】

◇右手上段(子音)

右手上段の練習、ここはカ行、ガ行、ラ行など。

き【IG】、こ【IS】、くき【IFIG】、かこ【IAIS】、かきこ【IAIGIS】、かきくけこ【IAIGIFIDIS】、
が【UA】、ぐ【UF】、がご【UAUS】、ぎが【UGUA】、がぎぐげご【UAUGUFUDUS】、
げこ【UDIS】、こぐ【ISUF】、かが【IAUA】、かご【IAUS】、がき【UAIG】、
ら【OA】、ろ【OS】、りろ【OGOS】、らる【OAOF】、らりるれろ【OAOGOFODOS】、
から【IAOA】、りか【OGIA】、かれ【IAOD】、がろ【UAOS】、ろぐ【OSUF】、

こあら【ISAOA】、がらな【UAOALA】、かりーな【IAOG:(')LA】、たから【HAIAOA】、
さかな【;AIALA】
ほてる【JSKDOF】、からだ【IAOAHA】、とらがら【KSOAUAOA】、
はらから【JAOAIAOA】、
あらし【AOA;G】、かしら【IA;GOA】、なりた【LAOGKA】、くさり【IF;AOG】

右手上段は、このほか小文字化する捨て仮名キーがある。

ぁぃぅぇぉ【PAPGPFPDPS】、ゃゅょ【TPATPFTPS】

さらに、右手上段には外来語特殊音としてファ行もある。

ふぁ【YA】、ふぉ【YS】、ふぁふぃふゅふぇふぉ【YAYGYFYDYS】
ふぁーすと【YA:(');FKS】、ふぉと【YSKS】、ふぇらーり【YDOA:(')OG】

◇右手下段(子音)

右手下段は、マ行、バ行がある。句読点もあるが、これはQWERTYのローマ字入力と同一なので練習は省略して良い。

ま【MA】、み【MG】、まめ【MAMD】、まみむめも【MAMGMFMDMS】
び【NG】、ぼ【NS】、ばぶ【NANF】、ばびぶべぼ【NANGNFNDNS】
もぶ【MSNF】、まぶ【MANF】、ぼむ【NSMF】
まどべ【MAHSND】、まびく【MANGIF】、むすぶ【MF;FNF】、めしべ【MD;GND】
みばえ【MGNAD】、かぶ【IANF】、さかさま【;AIA;AMA】、ばみる【NAMFOF】、

めだつ【MDHAKF】、まくら【MAIFOA】

◇左手上段(子音)

左手上段、パ行、ヤ行、ザ行、ワ行などがある。

ぴ【RG】、ぷ【RF】、ぱぱ【RARA】、ぱぴぷぺぽ【RARGRFRDRS】、
や【TA】、ゆ【TF】、よ【TS】、やゆ【TATF】、やゆよ【TATFTS】
わ【WA】、を【WS】、わゐゑを【WAEGWDWS】
ざ【EA】、ず【EF】、ざじずぜぞ【EAEGEFEDES】
ぴろしき【RGOS;GIG】、ぽまーど【RSMA:(')HS】、ぷーる【RF:(')OF】、やご【TAUS】、
たよる【KATSOF】、ゆめ【TFMD】、わらし【WAOA;G】、やまかわ【TAMAIAWA】、
わざわざ【WAEAWAEA】、ぴざ【RGEA】、しずか【;GEFIA】、みぞ【MGES】

左手上段には、他に外来語特殊音のヴァ行もある。

ヴァヴィヴヴェヴォ【QAQGQFQDQS】
ヴォーカル【QS:(')IAOF】、エヴァ【DQA】

さらに左手上段は、二重母音拡張の割当もあるのだが、それは一通りかな入力を習得できてから、後の方のステップで行うことにする。

◇左手下段(拗音子音・促音・撥音)

左手下段、チャ行、シャ行、ジャ行がある。このほか、促音の「っ」のキーや撥音「ん」のキーもある。

ちゃ【VA】、ちゅ【VF】、ちょ【VS】
しゃ【BA】、しゅ【BF】、しょ【BS】
じゃ【CA】、じゅ【CF】、じょ【CS】
ちゃーじ【VA:(')EG】、いしゅ【GBF】、しょか【BSIA】、しゃこ【BAIS】、かじゃ【IACA】、
ちょしょ【VSBS】、しょさ【BS;A】、しゅき【BFIG】

っ【Z】
あっ【AZ】、ぴっ【RGZ】、さっ【;AZ】
ん【X】
あん【AX】、おん【SX】、うん【FX】

左手下段は、撥音拡張の割当もあるのだが、それは一通りかな入力を習得できてから、後の方のステップで行うことにする。
また、促音は、拡張入力の促音＋カサタパ行の割当のほうが実際にはよく使う。

◇右手人差し指(拗音)

ローマ字の「y」に相当する拗音化キーは、AOURでは複数ある。子音と同段の右手人差し指キーが

それである。チャ、シャ、ジャ行を除く。

きゃ【IUA】、きゅ【IUF】、きょ【IUS】
にゃ【LJA】、にゅ【LJF】、にょ【LJS】
ひゃ【JJA】、ひゅ【JJF】、ひょ【JJS】
みゃ【MMA】、みゅ【MMF】、みょ【MMS】
りゃ【OUA】、りゅ【OUF】、りょ【OUS】
ぎゃ【UUA】、ぢゃ【HJA】、びゃ【NMA】、ぴゃ【RUA】
きょか【IUSIA】、ぎゃく【UUAIF】、てっきょ【KDZIUS】、あんぎゃ【AXUUA】

◇その他の外来語特殊音

外来語特殊音で上記に挙げたもの以外で、よく使われるもの。

てぃ【KPG】、とぅ【KPS】、ツァ【KPA】、ツォ【KPL】
でぃ【HPG】、どぅ【HPS】
うぃ【WPG】、うぇ【WPD】、うぉー【WPS】
くぉ【IPS】、ぐぁ【UPA】、いぇ【TPD】
てぃーぱーてぃー【KPG:(')RA:(')KPG:(')】、とぅえるぶ【KPSDOFNF】
でぃーる【HPG:(')OF】、あんどぅ【AXHPS】
うぉーくするー【WPS:(')IF;FOF:(')】、まらうぃ【MAOAWPG】

◇基本入力の仕上げ

ここまでで、拡張入力の割当を伴わない定義・綴りを練習してきた。これでローマ字入力と同等の割当分を一通り打鍵できるようになっている。

ばす【NA;F】、つくえ【KFIFD】、きーぼーど【IG:(')NS:(')HS】、もにたー【MSLGKA:(')】、
くらす【IFOA;F】、きょむ【IUSMF】、へっちゃら【JDZVAOA】、しゃしゅ【BABF】、
きいろ【IGGOS】、すぴーかー【;FRG:(')IA:(')】
ひじかけ【JGEGIAID】、こばこ【ISNAIS】、ばなな【NALALA】、ちりがみ【KGOGUAMG】、
みぎがわ【MGUGUAWA】
ヴァリデート【QAOGHD:(')KS】、みつびし【MGKFNG;G】、けーぶる【ID:(')NFOF】、
うぇぶかめら【WPDNFIAMDOA】

次からは拡張入力の練習である。拡張入力をマスターしなければ、AOURを使う意義が半減してしまうので、是非この後も継続して習得してもらいたい。

◇二重母音

子音と組み合わせたァい、ぅい、ぅう、ェい、ォうの五つの二重母音に定義を割り当ててあるもの。母音を単独で打鍵するより打鍵数が削減されるので、早めに習得してこの方法で入力をするようにしたい。

かい【IQ】、すい【;T】、つう【KR】、ねい【LE】、ほう【JW】
まい【MQ】、ゆい【TT】、るう【OR】、げい【UE】、ぞう【EW】

つうかい【KRIQ】、ほうそう【JW;W】、けいがい【IEUQ】、こうぞう【IWEW】
しょうどう【BWHW】、さいこう【;QIW】、ろうほう【OWJW】、ついずい【KTET】
ふぁいたー【YQKA:(')】、ばいたい【NQKQ】、くうき【IRIG】、かっぽう【IAZRW】

◇撥音節

子音と組み合わせたァん、ィん、ゥん、ェん、ォんの五つに定義を割り当ててあるもので、二重母音とも併せてこれも打鍵数の削減に効果があるもの。

かん【IZ】、しん【;B】、つん【KV】、ねん【LC】、ほん【JX】
まん【MZ】、りん【OB】、ぐん【UV】、ぜん【EC】、どん【HX】
かんらん【IZOZ】、しんかんせん【;BIZ;C】、ぽんかん【RXIZ】、げんねん【UCLC】
しゅんびん【BVNB】、さんせん【;Z;C】、だんらん【HZOZ】、ぴんぽん【RBRX】
せんさく【;C;AIF】、なんか【LZIA】、あんしん【AX;B】、きゃんでー【IUZHD:(')】
とうせん【KW;C】、だんさー【HZ;A:(')】、かんしょう【IZBO】、みんしゅく【MBBFIF】

◇拗音裏打ち

ョう、ュう、ャく、ュく、ョく、ュつの六つは、これまでとは違ったもう一つの方法による打鍵で、打鍵数を減らすことが出来る。

きょう【IO】、きゅう【IY】、しゃく【B;】、ちょく【VL】、しゅつ【BK】
にょう【LO】、じゅう【CU】、ひゃく【J;】、りょく【OL】、じゅつ【CK】
まんじゅう【MZCU】、ひゃくにん【J;LB】、きゅうか【IYIZ】、じゅうじゅつ【CUCK】
じょうりょく【COOL】、きょうきゃく【IOI;】、ちょくじょう【VLCO】

◇拗音以外の裏打ち

左手上段に子音キーがあるワ行、ザ行、パ行、ヤ行の一部は、母音が右手側の、本来の母音の対称位置のキーでも打鍵できるようにしてある。同指打鍵や打ちにくい配列となっている文字の入力の解消に繋がる。

小技【ISW;E;】、湯屋【TJT;】、パペット【R;RKPW】、ワープロ【W;:RJOS】

◇促音＋カサタパ行

促音に続く音節は、カサタパ行がほとんどであると思い、割当を定義してある。これにより、単独の「っ」【Z】を使うより打鍵数を少なくすることが出来る。

かっか【IAPZ】、こっき【ISPB】、がっく【UAPV】、しっけ【;GPC】、かっこ【IAPX】
きっと【IGPW】、かった【IAPQ】、わっと【WAPW】、ちょっと【VSPW】
ばっと【NAPW】、もっと【MSPW】、いっち【GPT】、たっち【KAPT】
きっさ【IGQ;】、こっし【ISQH】、こっぷ【ISQR】、のっぽ【LSQO】

拡張入力は他にも幾つかあるが、ひとまずここまで一通り習得ができれば、AOURを使った省打鍵もそれなりに効果が出てくるものと期待できる。

◇ァク音節

２音目に「く」がくる音節への割当。「ゃく」は裏打ちにあるので除く。

さく【;I】、まく【MI】、らく【OI】、だく【HI】、ざく【EI】
まくら【MIOA】、さくさく【;I;I】、はくだく【JIHI】、かがく【IAYI】、たくしょく【KIBL】、
まどわく【MSHSWI】

◇ァツ音節

２音目に「つ」がくる音節への割当。

かつ【IH】、なつ【LH】、はつ【JH】、だつ【HH】、ぱつ【RH】
がさつ【UA;H】、たつどし【IHHS;G】、そうはつ【;WJH】、きまつ【IGMH】、
やつら【THOA】、しんらつ【;BOH】、さんがつ【;ZUH】

◇拡張入力を含めた仕上げ

次のような少し長めの語句も難なく入力できるようになったら、あとは実践で文章入力を行ってもらいたい。

とうきょうおりんぴっく【KWIOSOBRGPV】
そうがくひょうじ【;WUIJOEG】
きんりんさんそん【IBOB;Z;X】
きんきゅうじたいせんげん【IBIYEGKQ;CUC】
しょうりょくかけんとうちゅう【BOOLIAICKWVU】
だいていたくけんさくちゅう【HQKEKIIC;IVU】
うんえいからのおねがい【FXDGIAOALSSLDUQ】
じょうそうぶのはんだん【CW;WNVLSJZHZ】
うぃんどうずとうさいぱそこん【WPBHWEFKW;QRA;SIX】
だけんれんしゅうちょう【HAICOCBRVO】
かくちょうにゅうりょくしようほう【IIVOLUOL;GTWJW】

◆補遺

◇AOURの考案・主要更新履歴

2006年末から2007年の初め頃に考案。ATOK用の定義ファイルを作成。Googleサイトで公開。
2008年12月。大幅見直し、拗音キーの変更や定義の拡張など。以降も定義の追加・修正。
2011年4月。促音＋タ行拡張追加。フル実装。
2011年11月。促音＋カ行拡張追加。
2013年12月。促音＋サ・パ行追加。以後約2年更新なし。公開サイト移転しリニューアル。
2016年3月。外来語特殊音の定義変更など。以後約4年更新なし。
2020年6月。ァク音節入力として整理。
2021年10月。公開サイト移転。
2021年12月。ァツ音節入力として整理。
2022年6月。裏打ち「ょう」の一部を変更。
2025年5月。左手上段子音の単音の一部の裏打ちに対応。

◇AOURのWebサイト

http://aourkbd.net/
考案者の考案経過や習得の経過、打鍵数の比較などをコンテンツとして公開している。

◇筆者落書き

この文書はAOURを考えて使い始めてから15年の時点で再編集した。毎日AOURしか使わない状態で、入力速度もAOURで1,300字程度/10分というところ。ローマ字入力も忘れず使えるが、もう戻ることはできない。今後もAOURでの和文入力を続けたい。（220104）

◆定義一覧（AOUR250502）

母音・長音・撥音・促音							
a	g	f	d	s	‘/:	x	z
あ	い	う	え	お	ー	ん	っ

長撥音拡張
`/"
ーん

捨て仮名												
	a	g	f	d	s			a	f	s		a
p	ぁ	ぃ	ぅ	ぇ	ぉ		tp	ゃ	ゅ	ょ		wp	ゎ

	基本					二重母音					撥音節				
	a(;)	g(h)	f(j)	d(k)	s(l)	q	t	r	e	w	z	b	v	c	x
i	か	き	く	け	こ	かい	くい	くう	けい	こう	かん	きん	くん	けん	こん
;	さ	し	す	せ	そ	さい	すい	すう	せい	そう	さん	しん	すん	せん	そん
k	た	ち	つ	て	と	たい	ついい	つう	てい	とう	たん	ちん	つん	てん	とん
l	な	に	ぬ	ね	の	ない	ぬい	ぬう	ねい	のう	なん	にん	ぬん	ねん	のん
j	は	ひ	ふ	へ	ほ	はい	ふい	ふう	へい	ほう	はん	ひん	ふん	へん	ほん
m	ま	み	む	め	も	まい	むい	むう	めい	もう	まん	みん	むん	めん	もん
t	や		ゆ		よ	やい	ゆい	ゆう		よう	やん		ゆん		よん
o	ら	り	る	れ	ろ	らい	るい	るう	れい	ろう	らん	りん	るん	れん	ろん
w	わ	ゐ		ゑ	を	わい					わん				
u	が	ぎ	ぐ	げ	ご	がい	ぐい	ぐう	げい	ごう	がん	ぎん	ぐん	げん	ごん
e	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	ざい	ずい	ずう	ぜい	ぞう	ざん	じん	ずん	ぜん	ぞん
h	だ	ぢ	づ	で	ど	だい	づい	づう	でい	どう	だん	ぢん	づん	でん	どん
n	ば	び	ぶ	べ	ぼ	ばい	ぶい	ぶう	べい	ぼう	ばん	びん	ぶん	べん	ぼん
r	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	ぱい	ぷい	ぷう	ぺい	ぽう	ぱん	ぴん	ぷん	ぺん	ぽん
iu	きゃ		きゅ	きぇ	きょ	きゃい	きゅい	きゅう	きぇい	きょう	きゃん		きゅん	きぇん	きょん
b	しゃ		しゅ	しぇ	しょ	しゃい	しゅい	しゅう	しぇい	しょう	しゃん		しゅん	しぇん	しょん
v	ちゃ		ちゅ	ちぇ	ちょ	ちゃい	ちゅい	ちゅう	ちぇい	ちょう	ちゃん		ちゅん	ちぇん	ちょん
lj	にゃ		にゅ	にぇ	にょ	にゃい	にゅい	にゅう	にぇい	にょう	にゃん		にゅん	にぇん	にょん
jj	ひゃ		ひゅ	ひぇ	ひょ	ひゃい	ひゅい	ひゅう	ひぇい	ひょう	ひゃん		ひゅん	ひぇん	ひょん
mm	みゃ		みゅ	みぇ	みょ	みゃい	みゅい	みゅー	みぇい	みょう	みゃん		みゅん	みぇん	みょん
ou	りゃ		りゅ	りぇ	りょ	りゃい	りゅい	りゅう	りぇい	りょう	りゃん		りゅん	りぇん	りょん
uu	ぎゃ		ぎゅ	ぎぇ	ぎょ	ぎゃい	ぎゅい	ぎゅう	ぎぇい	ぎょう	ぎゃん		ぎゅん	ぎぇん	ぎょん
c	じゃ		じゅ	じぇ	じょ	じゃい	じゅい	じゅう	じぇい	じょう	じゃん		じゅん	じぇん	じょん
hj	ぢゃ		ぢゅ	ぢぇ	ぢょ	ぢゃい	ぢゅい	ぢゅう	ぢぇい	ぢょう	ぢゃん		ぢゅん	ぢぇん	ぢょん
nm	びゃ		びゅ	びぇ	びょ	びゃい	びゅい	びゅう	びぇい	びょう	びゃん		びゅん	びぇん	びょん
ru	ぴゃ		ぴゅ	ぴぇ	ぴょ	ぴゃい	ぴゅい	ぴゅー	ぴぇい	ぴょう	ぴゃん		ぴゅん	ぴぇん	ぴょん
tp				いぇ											
ip	くぁ	くぃ		くぇ	くぉ										
up	ぐぁ														
kp	つぁ	てぃ	てゅ	つぇ	とぅ			てゅー		とぅー		てぃん			
hp		でぃ	でゅ		どぅ			でゅー		どぅー		でぃん			
y	ふぁ	ふぃ		ふぇ	ふぉ	ふぁい	~~ふぅい~~	ふゅー	ふぇい	ふぉー	ふぁん	ふぃん		ふぇん	ふぉん
wp		うぃ		うぇ	うぉ				うぇい	うぉー		うぃん			うぉん
q	ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ	ヴォ	ヴァイ	ヴォイ	~~ヴー~~	~~ヴェイ~~	ヴォー	ヴァン	~~ヴィン~~	~~ヴン~~	~~ヴェン~~	~~ヴォン~~

	裏打ち							
	y	u	o	;	h	j	k	l
i	ぎゅう		きょう	きゃく				きょく
b		しゅう	しょう	しゃく		しゅく	しゅつ	しょく
v		ちゅう	ちょう	ちゃく				ちょく
l		にゅう	にょう	にゃく				
j		ひゅー	ひょう	ひゃく				
m		みゅー	みょう	みゃく				
o	りゅう		りょう	りゃく				りょく
u	ぎゅう		ぎょう	ぎゃく				ぎょく
c		じゅう	じょう	じゃく		じゅく	じゅつ	じょく
h		ぢゅう						
n		びゅう	びょう	びゃく				
r	ぴゅー		ぴょう	ぴゃく				
kp		てゅー	とぅー		つぃ			つぉ
hp		でゅー	どぅー					
y		ふゅー	ふぉー					
wp			うぉー					

	ァク/ァツ音節	
	i	h
i	かく	かつ
;	さく	さつ
k	たく	たつ
l	なく	なつ
j	はく	はつ
m	まく	まつ
t	やく	やつ
o	らく	らつ
w	わく	
u	がく	がつ
e	ざく	
h	だく	だつ
n	ばく	ばつ
r	ぱく	
y	ふぁく	

	促音＋カサタパ行									
	z	b	v	c	x	q	t	r	e	w
p	っか	っき	っく	っけ	っこ	った	っち	っつ	って	っと
	;	h	j	k	l	p	y	u	i	o
q	っさ	っし	っす	っせ	っそ	っぱ	っぴ	っぷ	っぺ	っぽ

	特定定義（全て選択定義）					
	;	k	l	m	o	’/:
i		こと		かも		
;		した		~~します~~	する	
k	として			ため		
l		にち	~~なに~~			
j		ひと				
m		また	もの			~~ます~~
e		じつ				
h	~~です~~				である	
n		~~ぶつ~~				

・赤枠・青枠は定着度が高い定義領域
・ は選択定義として、今後削除したりする可能性がある定義。
・ は選択定義のうち、ATOKでは既に定義を削除したもの。

この文書は一太郎を使って作成した。